

美文字の魔法

森野 水琴

私の文字には催眠効果があるようだ。心の泉に良く響く。いつしか酔ったような気分になる。それを美文字酔いと私は呼んでいる。実は私自身も酔うのだから、あなたが酔ったとしても何も不思議なことではない。もちろん個人差があるので全員酔うことは期待していない。このような酔いは他人の文字から得られないので、私にしかできないことのようなのだ。

こう書いてみると、美文字酔いは自己陶醉のように思える。自分の長所や魅力、自分の心の渇きを潤すというわけである。これだけでも心の渇きは充分潤う。自分の心の渇きを潤すことが出来てこそ、他人の心の渇きを潤すことが出来る。実際、心の渇きを潤す魔法は完成している。

まず、心の泉を意識する。目に見えるわけではないので、泉をイメージするだけでよい。泉の表面に水滴が落ちて音を奏でる。それを感じることで心の渇きが潤っていく。この水滴が文字なのである。長所や魅力を表した文字なのである。奏でられる音が美しく感じられるとき、その文字は美文字になる。以上のことを自分の心の泉で試してみ、次に他人の心の泉で試すわけである。

ここまで書いてしまうと真似する人が現れるかもしれないが、それは構わない。今は、知性の渇きを潤す魔法を開発している。今後この本を連載していく楽しみがある。

ひらがなは あたたかい
ひらがなは やさしい
ひらがなは やわらかい

ひらがなに つつまれて こちいい
ひらがなに こちよさに とけていく
ひらがなが とけて ぜんしんを かけめぐる
ひらがなの やくどうに ときめく

ひらがなの ときめきは たから
ひらがなが せなかを おす
ひらがなに いざなわれて さらなる たかみに

ひらがなが つたえてくれる いにしえの はなやいだ ようすを
ひらがなが おしえてくれる はのように

ひらがなの まほうに かかってしまった

書き写したくなるほど美文字で書かれた手本。何度も書き写すうちに覚えてしまう。

余分な力が抜けて、しなやかに書き写していく。そして美文字が書けるようになる。

いろいろな文章を書き写したくなる。書き写したくなる文章を探すために、たくさん本を読む。

自然と沁みて知識になる。知性の渇きを潤す。

蓄えた知識に呼応するように、天から言の葉が降りてくる。
それを書いていく。

書道教室で変体仮名へんたいがなを習った。ひらがなの異体字である。

先達の詠んだ和歌が読めるようになり、真似て書いてみる。最初は恐る恐るだった。脳内で和歌を唱えるようにしながら書くと、それなりに書けるようになる。毎回違う和歌を習うようにして蓄積していききたい。

古文を読み、書き写す楽しみ。ひらがなの持つ やわらかさを堪能。
美しく より美しく

源氏物語の写本の画像集をインターネットで探り当てダウンロードした。二千八百あまりのファイル。

まずは桐壺の巻の冒頭の一文を読んでみた。
変体仮名を習っているお陰で読みやすい。

漢字かな混じりの文に、大小のひらがなが滅めり張はりを付ける。

千年の時を経て伝わる美文字。

この一文だけでも書けるようになりたい。

ほぼ一年間、英語とフランス語を筆記体で書くのを封印していた。
自分の字が、あまりにも見苦しく感じたからである。

活字体で丁寧に書いてみたのだが、遅いうえに、力が入り過ぎてしまう。
久しぶりに筆記体を解禁してみた。

丁寧に書くことに注意したお陰で、何とか見られるようになった。

なめらかさも嬉しい。

たくさん楽しく書いていけそうである。

暖かいまなざしで見守ることで魅力が引き出せるらしい。
すると暖かいまなざしで言の葉を紡いでいけば良いことになる。
新たな試みに心が躍る。
誰が入力しても同じような字体なのだが、私らしく紡いで文字力を高めていきたい。

私の入力した文を読むと美薬効果が現れる場合があるようである。
副反応で酔ったような気分になることが予想されるが、今のところ効き過ぎたという苦情は寄せられていない。
知性の渴きを潤す魔法が完成する一助となればと期待している。

美しいものを見て、素直に美しいと言う、そんな営みが感性をはぐくむ。
そして美しい表現を見つけて、書かずにはいられなくなっていく。
「感性の雫」と呼んでおこう。